

# 感傷詩人西行

伊藤俊雄

## 〔一〕「あはれ」

日本文學精神の中樞をなすものは「ものゝあはれ」である。この文學の精神の流は如何にそれが變つた形を呈して居る場合でも、その河床には何時でも「ものゝあはれ」と同質なものを發見する事が出来る。即ち對象と同化し切つて、同じく涙を深く藏し乍ら殆んど同じく泣き濡れやうとする一步手前で、辛ふじて踏み止まつて、客觀を維持してゐる微妙な一線に日本文學の獨自な視野が開けてゐるを觀られる。この「ものゝあはれ」の精神は平安朝文學より明治時代の文學に至る迄、時の流れによつて多少の理智の洗禮を受けては行つたものの、各時代を通じて一貫して流れてゐるのである。

此の如く「ものゝあはれ」即「綜合的な深い情感」は我國文學の生命となつて幾多の感傷詩人を生み出してゐるのである。

是等詩人の中ロマンチックな中に感傷的氣氣をたゞへた多感多恨の詩人西行が、旅から旅へ自然の中に放浪し、そこから自然、人生そのものの奥底に流るゝ一切に普遍する愛を汲まふとした聖なる愚かさ、みすほらしい魂の放浪者としての彼の人間性や、又旅から旅へ、そして旅の中に死んで行つた古人を慕つて自らも長い漂泊の旅に出で、「ものゝあはれ」に傾倒して行つた旅人芭蕉の行脚姿、或は和歌と詩の中に、自己の不死の生活を畫いて死んで行つた大愚良寛の

姿に、私は云ひ知れぬ懷しさゝ憧憬を感じるのである。

## 〔二〕 西行とその時代

法師西行は「百練抄」や頼長の臺記等に依つて見るに鳥羽天皇の元永元年（皇紀一七七八年）平清盛に同年に生れ崇徳院の保延六年（法然上人六歳の時）二十三歳で出家し、入寂の年は慈鎮和尚の拾玉集に依るに、河内國弘川村の弘川寺で文治六年（四月改元建久元年）二月十六日（皇紀一八五〇年）七十三歳寂しあり、清盛より九年長生をしておる事になり法然上人五十八歳の時である。

以上で其の時代が略々領解されると思ふのであるが更に詳述するならば、彼の七十三年の生涯は平安朝の最末期に屬し、日本歴史の新しい一つの轉廻、新日本文化の黎明直前の時代で、舊きものゝ崩壊し新しきものゝ未だ建設されざる丁度中間であつて、日本文化第一次の疾風怒濤が見舞ひ來やうとする激しい時代であつた。遠く空也や源信によつて唱導せられた來世往生の思想が、漸やく良忍や法然上人によつて淨土教として弘通せられるに至つたところの、全く一新された時代を生涯として生きたのである。かゝる渦まきつゝ狂奔してゐる過渡期に揉まれながら、自分の生きる道をしつかりに誤魔かしのない鋭さを以て見つけやうとしたのである。

## 〔三〕 出家の動機

法然上人が九歳にして父時國の遺言により將に出家の因縁結ばれやうとする一年前に於て、彼西行は二十三歳にして卒然人の世の無常を諦觀して一切を頼むに足らざる「空」を觀じ魂の放浪者として天涯孤獨の自然漂泊に旅立つたのである。

その原因に就ては、山家集を繙けば二十歳頃既に萬法流轉諸行無常を觀じた歌が載せられてある點や臺記の康治元年三月十五日の條を見るに當時一般の厭世思想に起因してゐるを見られ

しをりせでなほ山深く分け入らむ

うき事聞かぬ所ありやこ

の意より見るに禁庭の北面の武士佐藤義清としての彼西行が、人生殊に政治のうるさくに堪えられなかつた所に動機が潜在してゐることも考へられる。更に又源平盛衰記には彼の出家の動因を戀故だに記してゐるが山家集の無數の戀の歌及び月の歌を見るに、自分の主筋に當る高貴な相手即ち堀川左大臣俊房の外孫得子後の美福門院に對する失戀の結果と考へられる。

以上無常厭世觀、政治的原因、失戀の痛み等の複雑な原因が競合した結果の出家と考へられるが特に失戀の痛みこそ其の最大の動因であつたこと考へられる。自然の中に自己の姿を見、自己の姿の中に自然を見つゝあらゆる情感を三十一文字に載せて、生涯を魂の放浪に捧げた旅立ちちは、實に若き血に燃ゆる彼西行の弱く且強い息吹きを感じるのである。

かゝる身におほしたてけんたらちねの

親さへ辛き戀もするかな

一方に於ては世を呪ひ而も他方に於てその呪ふ世に即いて戀を育てゝ行く、この相容れぬ二つの心の葛藤にちり／＼責められ苦しんでゐる彼の姿がまぎ／＼見られる。しかも彼はこの失戀の古疵のうづきを七十を越える迄も癒されず遂に墓の中まで持つて行つたのである。此の如く彼の魂の復歸への首途は實に人間的な色彩に包まれてゐるのであつてそれだけに彼のこの轉換へのプロローグは我々に大きくアツピールするものがあるのである。當然來るべき悲しみの日が近づいて來るにつれ惱みに惱んだ結果遂に二十三歳の春愈々出家遁世を腹を定め

いざさらば盛り思ふも程もあらじ

貌姑射が嶺の春にむつれて

と遂に百練拂に示す如くその年秋十月十五日に出家したのである。そこで彼は西方の淨土に永世の安住を得たいと云ふ日頃の念願を象徴する爲に自ら西行と名乗り、戀ふる自然の世界に出て、無方の野を見はるかして乍ら行く雲流るゝ水を追ふ一雲水となつて魂の故郷を求めて處定めずものの、心の、奥底を尋ねやうとしたのである。

#### 〔四〕 遍 歴

黒色の粗末な法衣、網代の笈、笠、頭陀袋、竹杖は華やかな北面武士たりし彼の現在に於ける全財産であつたのである。彼が最初に尋ねたのは山家集の歌の詞書によつて鞍馬寺と推定され其の後東山に移り長樂寺雙林寺に約一年暮したやうであるが共に延暦寺の別院であるから天台宗に於て初めて僧籍に這入つたこと考へられる。法華經の中に描かれた諸法實相の考へや一念三千の教に心を止めて考へさせられた事であらう。峰吹く風のざわめきにも谷間の清き流れにも佛の心を見る事を懈らなかつたであらう。そして個々のものゝ上に佛を見、愛を見る事を樂しんだ事と思はれる。然し彼の心の底より搖がせたものは人間としての悲しき淋しき現實の苦惱とそれに對して至烈に動く魂の故郷への祈願であつた。西行！ 西行！ 彼の名は如何に彼の心に適はしいものであつたか。彼は畢命を期して人の世を漂泊ひ行かうとし、さすらひは實に魂の故郷への激しい修行であつたのである。しかも彼は人生の苦惱に煩ひつゝもこもすれば失はれんとする救への確信を培はうと努力し夢の間も菩提心を忘れたのではなく貪ほるやうにすべてのものから愛を汲まふとしてゐるのである。

二十五六歳頃には西山に居を移し眞言の法輪寺を賴り其の後南都興福寺、醍醐理性院、初瀬寺、高野山、仁和寺、弘

川寺等眞言宗の寺院ばかりに縁を結んでゐる。初めは天台僧であつたが後には眞言の醍醐理性院派の僧となり、一山一寺の住職ではなかつたが、晩年は高野山では重要な位置を占めてゐた事が高野寶簡集に於ける彼自筆の書簡に見えてゐる。

然し彼の三十歳以前は未だ出離の正覺に達して居ないで後宮の女官等との交渉未だ頻繁であつて、縮衣に脂粉の匂がして居る。五十歳迄の高野中心の時代には眞言の修行を本氣でやつたらしいが尙都に多分の執着を持つて居る。西方を欣求して人生を厭離しやうと努めつゝ尙現實の自己に生きたいと望む姿、人間愛を捨てやうとして捨て得ぬ矛盾した姿、この現世に對する執着と出離との相剋は

香を覓めん人をこそ待て山里の

垣根の梅の散らぬ限りは

と浮世を捨て乍ら浮世を忘れ切れない所謂淋しがりや人戀しがりやの心持をよく表はしてゐる。

行方無く月に心の澄み澄みて

果ては如何にかならんさすらん

と一介の世捨人が更に月光の表はす寂寞境裡に、身を捨て行く彼の心の一面に

厭ふ世も月澄む秋になりぬれば

長らへずばと思ふなるかな

と浮世の秋に愛着してゐる。之は矛盾である。しかしかく矛盾を強く表はす事によつて月の趣の深さは一層強く表現されてゐるのではあるが、情感の深い詩人西行は此の如く捨てた浮世にいつも心を引かれてゐるのである。

花に染む心の如何で残りけん

捨て果てゝきこ思ふ我が身に

こ花や月に心から没入して、その美しさに心を打ませて遊んでゐるのであるが、そこが山家としての西行の有する矛盾である。しかしその矛盾は反つて情趣の深い文學を生む所以ともなつて居るのである。

すべて對象に染着する心は未練であり迷である。出家してその時以來未練や執着は綺麗さつぱりこ、捨てゝしまつた筈であるのに今花に對して見ればその愛着の心が、かくも切に残つて居る。悟つてしまへば無一物になつて廓然こ文學も美術も消滅するかも知れぬ。西行の文學は悟り切れぬ心の歎息が生れてゐるのであつて、悟り切れぬ心を悟り切れぬまゝに詠歎してゐるこころに彼獨特の味はひが出て居り、かく自分の徹底し切れぬ心持を持つて居る事は彼のしみくこ述懐して居るこころの次の歌によく表はれて居る。

世の中を捨てゝ捨て得ぬ心地して

都離れぬ我が身なりけり

西行の一生を遺憾なく云ひ表はしたものとこして有名な歌であるが、これこそ彼の偽らない心持であつたらう。そこに彼の間味が多分に流れて居り僧としては人間味の豊かな僧であり、いつまでも聖者にはなり切れず愚痴もあり迷ひも持つた平凡ではあるが懐かしい人間であつた。之が又詩人として獨特な天分を發揮した所以で、山家集一部はこの執着こ愚痴こ人間的情熱こ宗教的憧憬こが渾然こして一になつて織りなして居る。

かへり行く人の心を思ふにも

離れ難きは都なりけり

柴の庵のしばし都へかへらじこ

思はむだにも哀れなるべし

強ひて離れ去つた名聞の衢たる都を慕ふ心が、歸り行く人の姿を見てゐる中に再び勃然と起りそこに自らを哀れみ觀する人間としての彼の面影が窺はれる。

彼は宗教的な信念と熱意を以て自然の懷の中に飛び込んで行つたことは云へ、芭蕉程の感情の制禦は出來ず又透明な徹底さを有せず自然を相手の自己鍛錬とする修行の堅さも見られない。西行には未だ感情の濁りがありねばくした執着があり、自己に甘へつゝ自然の中へ自己解放をしやうとする。かうした二元的な生き方は少くとも芭蕉的ではなく、西行は人間を嫌つて自然の中へ逃がれつゝ、しかも尙

淋しさに堪へたる人の又もあれな

いほりならべん冬の山里

と人間への懷しさを口にせずには居られないのである。

閑けさや岩にしみ入る蟬の聲

古池や蛙飛び込む水の音

と自然の姿と觀念の調和を得、瞑想的夢幻の世界に誘はれ完全に客觀化を遂げ得た彼の芭蕉の禪的の含蓄ある幽玄味の聖道的なるに比較する時人間西行の上に淨土教的求道者の生きた姿を見る事が出来るのである。

こゝを又われ住み憂くて浮かれなば

松は獨りにならんすらん

人間愛の拘束から離れて自然への愛を追求した時そこには人間愛の場合と同様な執着束縛を西行は發見してゐる。彼は深い人生愛を持つが故に無常觀を抱いたと云へる。その深い人生愛の有限の人生との醸す矛盾苦惱を歎じつゝ、去つて自然へ這入つたが、しかも尙自然に捉はれてゐた。自然への愛がやはり執着となり惱みとなる事は人間愛の場合と等

しかつた。かゝる際に於て生れ出づる感傷を歌ひ挙げ自然を放浪し行脚の旅は続けられたのであつて、彼には強さに徹せず一面にかう云ふ弱さがあつたのである。

彼が高野に籠居時代一日下山し折よく此の地へ巡錫して來た吉水の慈鎮和尚に遇つて、「出家以來足に任せて山水の間に漂泊し佛跡にも詣り稀有の大徳にも參じ只管佛の榮光を慕ひ歩きました但未だ確かな體驗も得ず苦しんで居る」を告白して居るが實に血の滲み出る様な偽らぬ彼の心の奥底ではないかと思はれる。

苦しむ、苦しむ、それが精進であり救への道ではないか。苦しむ姿の刹那にも如來の慈光を仰ぎ得る事を願つて居るのではないか。やがてこの西行の苦しみは次第に魂の安住への豫約ともなつてゐるのである。

此の様に還愚の道への彼の流浪を通じそこに描き出されてゐる此の西行の人間性に云ひ知れぬ魅力を感じずには居られない。そこには法然上人の如く聖者高僧らしさは見られないとするも、彼の非僧非俗の愚禿親鸞が疑なく愛を信じ願を信じ、救ひを確信しつゝ、しかも其の間に人間業の桎梏の中に血みぎろの漂泊を續けて行つたあの聖愚の投影が見られ、六十餘州を旅から旅へ心の母、魂の故郷を求めて旅に死んだ一遍の愛の歡喜に充溢した漂泊の姿が見られる。或ひは又悟し去り悟し來つて猶ほ撥無し去る事の出来ない愛別離苦の世界を見ずに居られず、放擲し去り拂拭し去つて猶ほ且薺々として魂にまつはる惱ましき世界を忘れ去る事の出来なかつた良寛が和歌と詩の中に自分の不死の生活を描いて死んで行つた大遇の道を思はしむるものがある。

親のない子はどこでも知れる爪を啞へて門に立つ……我身ながらも哀也けり。

我々來て遊べや親のない雀。

六歳彌太郎

彼の俳諧寺一茶が悲慘な惱ましい生活の首途をなして、世の濁流の中に具さに辛い世の中を味はひつゝ魂の故郷を求めて行脚し



露の世は露の世ながらさりながら

こ深い哀傷こ執着の中にのた打ちまはり乍ら、愚の生活を俳諧に刻んで魂の滲んだ潤ひのある、豊かな藝術を産み出し

こまかくもあなた任せのこしの暮

五十一齡一茶 文政二年十二月

こ晩年世捨人として漸く安住して行つた自然兒一茶の面影は亦西行のそれであつた。

月、花、雲、水こあらゆる對象に深い執着を藏しつゝ救の道への西行の遍歴にも漸く圓熟の時は訪れ五十歳以後の仁安三年冬再度の四國旅行から文治二年秋再度の奥羽行脚の直後に亘る二十三年間には彼の最も圓熟し超脱悟入した風貌を窺はしむるものがある。

文治二年秋東大寺の俊成房重源の囑により、大佛塗金の沙金勸進に奥州平泉の藤原秀衡の許へ六十九歳の老軀を厭はず旅行してゐるがその時の作に、

年長けて又越ゆべしと思ひきや

命。。。。なりけり小夜の中。。。。山

こあり。「命なりけり」こ深い因縁を拜んでゐる彼の述懐こそ人生五十年すべての苦惱を煩ひつゝ畢命を期して世の荒浪を彷徨ふた尊い體驗よりして初めて得らるゝ、運命的な響をさへ持った含蓄のある語「命なりけり」が生れてゐる。

又吾妻鏡によるこ、此の奥羽紀行の途中鶴ヶ岡八幡の社頭で頼朝に逢ひ、其の館にて招待され其の翌朝引出物として銀製の猫を貰つたが、一處不佳の我が身には要もなしこ、途上に遊戲する兒童へ與へて去つた西行の事が記されて居るが、この一件にも彼の超脱した一面を見る事が出来るのである。

武藏葛飾の邊り、如月の風に吹かれ雪に埋まり乍ら、

捨て果てゝ身は無きものと思へども

雪の降る日は寒くこそあれ

こ人間の述懐を誦しつゝ、移り行くものゝ上に移り行かざるものゝ心を觀じ、移り行かざるものゝ上に移り行くものゝ相を見る事の出來た老僧西行は山河跋涉幾百里漸く平泉の館に辿り着いて、壯圖一世を蓋ふた豪壯な秀衡の館に落付いたのであるが、やはり彼の頼朝に對した時と同じやうに淡い水の様な心で秀衡に面してゐる。青年時代出家して以來人の生死、運命の數奇、時の興亡を云ふやうなあらゆる世上の現象に對して悶へ、苦しみ、索り、冥想した揚句老來漸く法界の眞諦に觸れ初めて差別の牆壁を撤し去られた西行の目には最早かうした豪快な生活も、青天井を屋根にした草枕の生活も、一代の英雄も、一介の土民も、等しく平等に見得る悟入した老境に到達した西行の面目を想見する事が出来る。歸依の全きに徹し佛陀の光被の中に包まれた人間西行はかくの如く彼の晩年に於て見出されるのである。

## 〔五〕 歌人としての面目

山家集に於ける彼の和歌は平安朝貴族文化の總決算であると共に、それを基礎にしつゝ新文化建設への動向を見せており、彼の意志の力は彼の生き方の實踐そのまゝに現はれて居るのである。

願はくば花の下にて春死なむ

その如月の望月の頃

に於て自分の本當の叫びを歌ひ自己の進む道を敢然と宣言し他人の揣摩臆測に左右されない堂々たる所信への邁進がある。頃は如月、やゝ朧寒い櫻月夜、最も慕つて居る釋尊入涅槃の日に花吹雪に埋もれ乍ら、波瀾に満ちた自己の、愚かなりし魂の彷徨人の人生の格闘の鋒を収めやうと云ふ、朗らかに率直に自らの心情を吐露せんとする氣概が此の歌の全面に満ちてゐる。この歌以前の否定的な西行に對する魅力も、本來の面目に歸つて死ぬ！「ものゝあはれ」風流に徹

した此の歌の境地の如き、かうした肯定的な明るさがなかつたら、その魅力も半減されたであらう事を考へるこゝ、つくづく之は圓光の射す歌である。西行を風流の宗とした芭蕉の西上人像讃に、

すてはてゝ身はなきものと思へども

雪の降る日はさぶくこそあれ

花のふる日はうかれこそすれ

こあるが捨身行脚に、山居に、如何に超脱した西行でも、よしや寒暑を超克し得たとしても季節に無關心であつたらそれは自己欺憫である。死所を、死時を季節に求め、又自初の戀ひ慕ふ釋尊を列べて歌ひこなしたところに櫻花に對する深い愛着も見られ、かく花を戀ひ、月を戀ひ、春夏秋冬四季折々の自然に投影された彼の體驗には、詩人としての生涯の面目が冠せられてゐるのである。

自然の中に自己を解放し漂浪すること幾十歳、魂が唯だ自己の魂のみが直接に實證する還愚の世界に生涯を捧げ魂の奥の遙か彼方、故郷の母の膝下に宛ら潮の引いて歸り行く如く、感傷詩人の面目を施して、彼西行は自ら希つたまほり如月の望月の頃、建久元年二月十六日七十三歳を以て河内弘川寺に於て寂定として永い眠りについたのである。